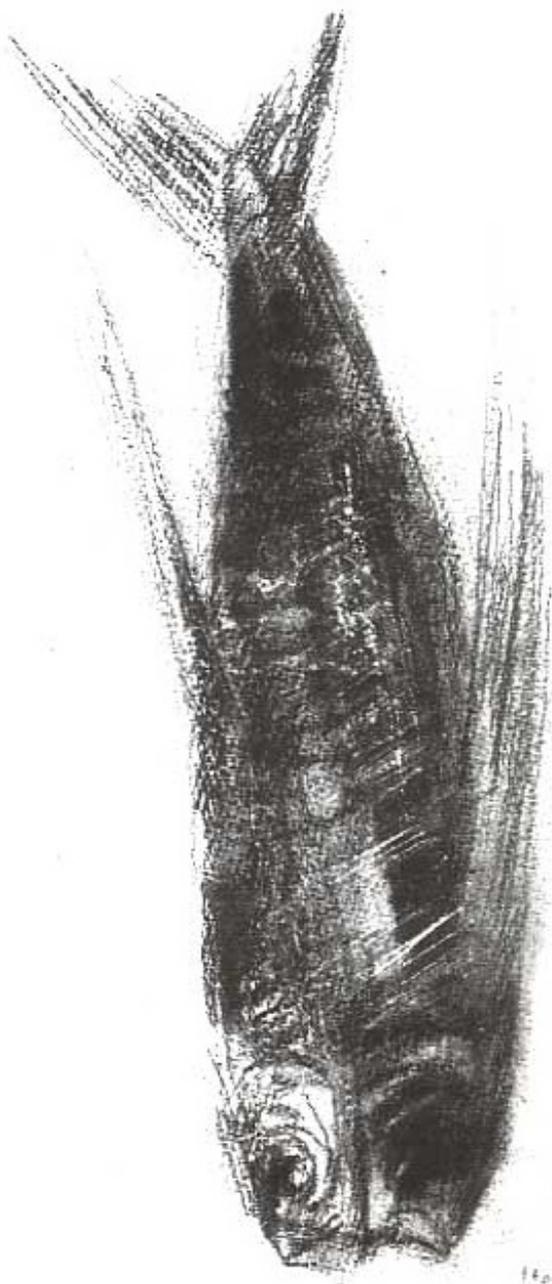


昭和43年7月1日発行  
平成17年2月5日発行(毎月5日1日発行)  
第45巻2月号(通巻542号)

# 風土



2

1407

冬  
す  
み  
れ  
  
神  
蔵  
  
器

麦  
芽  
立  
つ  
地  
に  
福  
音  
の  
一  
頁  
  
強  
霜  
や  
一  
つ  
の  
墓  
の  
こ  
ゑ  
を  
舉<sup>あ</sup>  
ぐ  
  
約  
束  
の  
墓  
参  
を  
の  
こ  
す  
年  
の  
内  
  
百<sup>か</sup>  
濟<sup>ん</sup>  
觀<sup>の</sup>  
音<sup>ん</sup>  
の  
背  
筋  
の  
艶  
も  
十  
二  
月  
  
飛  
ぶ  
も  
の  
も  
許  
さ  
ぬ  
冬  
の  
ゆ  
り  
大  
樹

けいじ亡し高嶺さくらの返り花  
枯蓮にのこれる水の鈴張れり  
バイブルに塩の匂ひす聖夜かな  
極月の太宰の墓に女佇つ  
ふるさとの山なつかしむ年忘れ  
かながなべてま冬のぼらの「宴」<sup>うたげ</sup>かな  
滝の音聞きわけてゐる冬すみれ



# 竹間集

同人作品



片時雨

佐藤よしい

石路に雨降る夜は旅の息浅し  
湯豆腐を熱し熱しと京に居り  
冬の蝶よぎる長谷寺の門前町  
京漬の大樽ならぶ神迎  
暮早し寺町鐘の音を渡す  
小春かな寂聴庵を覗きもし  
旅果に逢ふ嵯峨野路の片時雨

今朝の冬

相沢有理子

夫の下痢いつかな止まず冬きたる  
濯ぎもの日毎に殖ゆる寒さかな  
など死すや女流の菓子舖霧流れ  
保養地に霧深まりぬK女の死  
穂すすきに酒を供へて師の忌かな  
子の文に癒やされし夜の冬薔薇  
揺り椅子に日差しやはらか今朝の冬

日記買ふ

宮城 白路

北風に尻持ち上げてペダル漕ぐ  
北風きた衝くや背にネクタイを翻し  
煤逃げや居酒屋に待つ四斗樽  
何食ふか考へてをり懐手  
押さへれば膨らみ返す落葉籠  
何の日か忘れて十二月八日  
死に神に追ひ帰されて日記買ふ

桐生機町

— 田村すゝむ —

買<sup>かい</sup>場<sup>ば</sup>紗<sup>さ</sup>綾<sup>や</sup>市立つ通り今朝の冬  
の庄の織り鮮<sup>あたら</sup>しや紫<sup>ゆかり</sup>館  
機町や糸屋通りの石路明り  
曳売りの朝<sup>あした</sup>深谷の葱の艶<sup>てり</sup>  
箴音の桐生機町冬日和  
小春日を背負ひて覗く醤油蔵  
機町の風を平らに石路の花  
蔦紅葉映ゆる下野新聞社  
門柱<sup>群馬大学</sup>も煉瓦造りや銀杏散る  
手も足も生きて機織る小春かな

近江辻通り白壁石露の花  
箴音の軒に日当る吊し柿  
表門裏門枯るる煉瓦蔵  
侘助の白や安吾の終焉地  
機音を空へ逃がして冬支度  
ゑびす講の福坂を来る空つ風  
北風吹いて鋸形の屋根を研ぐ  
蔵屋根の瓦噛みあふ初時雨  
味噌蔵に並ぶ時雨の醤油蔵  
今日いち日赤城を隠す時雨雲

# 山河集

同人作品



神蔵 器選

義経の太刀より冷えて衣川  
雨となる詩の朗読や一葉忌  
鉢叩き煙の如く雨に立つ  
かつこめの残りの福も三の酉  
灯台は海鳴りばかり茶の木咲く

近藤幸三郎

芭蕉忌や近江蕪の甘酢漬  
水張つて十夜盥に新塔婆  
会津墓地桜紅葉の降りしける  
待庵や明障子の太鼓貼り  
待庵の二畳台目や笹子鳴く

橋添やよひ

歩道無きところのありぬ鎌鼬  
眠れば死眼開けば木の葉降る  
草より落つ十一月の蜥蜴かな

根岸 善行

厨より湯殿へ妻の音寒し  
足下の覚束なくて冬の蝶

伝言のあり綿虫を呼びもどす

工藤ミネ子

散るときは蝶にポプラの無一物  
想ひ出はほほゑみに似て小春畑  
返り花幼なき梅の木でありし  
自然薯掘りの息やはらく棒の尖

大観の黒の一筆冬に入る  
極月の大道芸人火を吹けり

川井 政子

兎めくマチスの切り絵冬うらら  
開け閉めのかろきを指に白障子  
埋火やこころの賢治童話集

◇特別作品◇

## 土塁

橋本 之宏

冬ざるる土塁の上の椎大樹  
日曜画家鳩の動きに動きけり  
教会に神在したり神の留守  
鳩潜り元の水面となりにけり  
桂郎忌万年筆のインキ替ふ  
あらぬ方へ現れにけりかいつぶり  
白波の沖へ向かへり神の旅  
蒔絵めき柁の花地に散りし

冬めくや握り太なる万年筆  
夕暮れや何処に帰るかいつぶり  
世の中が回り始める師走かな  
養生に白布巻かれし冬木肌  
大綿の行方定めぬ行方かな  
山茶花や地がさそひぬる散りはじめ  
たよられて蔓絡ませり冬木立  
冬ぬくし桂郎の書死蔵せり  
池の面に落葉色なす瓢の池  
綿虫のなにゆゑとなく飛びにけり  
湿原の枯色見せて刻の無し  
落葉積む白金長者館跡

# 風土集



# 神蔵器選

図書館にする予約本冬隣 川崎 山本 浪子

ロシアよりバレエのたより冬近し

蜂蜜の一匙固し今朝の冬

糠床に糠を継ぎ足す小春かな

夫と我にいつしか増えて冬帽子

綿虫のよく飛ぶ電子工学部

全身を水ゆき渡る今朝の冬

山茶花の風より先にくづれけり

落葉掃き寄せてひとりの音の中

熱燭やすでに亡父の来てゐたり

小机にペン置く音や一葉忌 東京 柴田 久子  
一茶忌や水晶となる山の水  
分かれ棲む男神女神も旅用意  
天地の間に水音かいつぶり  
煙草の火夫に勤労感謝の日

雲に日の当たりをりけり大根引く 東京 柿沼 盟子

裸電球まつすぐ下がりの西

佗助や練りし陶土に指のあと

乾ききる音聞きたくて落葉徑

新宿のビルの底より冬の月

若菜浜 二句

一日を仏回りや石露の花

お水送りの道に出でたる穴まどひ

銀杏黄落レンガ倉庫の美術展

短日のランドマークタワーの入日かな

佗助やはらから耳の遠くなり 東京 林 裕子  
冬蝶や伊達家寄進の能舞台  
榎大樹は江戸一里塚黄落す  
霊園に著名人一覽石露咲けり  
日の恵みとらへて芙蓉枯れに入る

横須賀 平田紀美子